

A 課題の整理 援助者が感じている課題

事例にあげた課題に対して、あなた自身が困っている事、負担に感じている事等を具体的に書いてください。

- ・現実のこととしてできないことやわからないことにぶつかり、「それでも今できることを続けたい。」と話すAさんに対して、「書くこと」と「最後まで成し遂げること」について今できるサポートは何か。

【質問】

今という時間に何がおきているのか、それをどんなふう限定して支援しようと考えていますか？
書いている一瞬も成し遂げた瞬間も大切な今だと思います。

【回答】

質問のとおり、書いている一瞬も成し遂げた瞬間も大切な「今」だと私も考えます。ただ、一方で、書けなくなってきたことを実感したり、最後まで物事を続けることができにくくなっていることを実感している「今」も、同時にAさんの中にあるように思いました。

Aさんの「今」に何が起きているのかを考えると、出来ることと出来ないことが交錯している状況ではなかつたろうかと思えます。それも、今まではまだ出来ることの方が多かったはずなのに、最近ではできないことの方が多くなりつつある状況ではなかつたろうかと思えます。

その時に私たちは、出来なくなったことに直面してつらい思いをするのなら、これ以上頑張らなくてもいいのでは？ということと、もう少し工夫をすれば続けることができるのでは？という二つの支援を考えました。しかし、そのどちらを選ぶのかは私たちでは答えを出すことはできませんでした。そこで、Aさんにどうしていききたいか？ということ正面から尋ねてみました。その結果、この時点では、工夫をして続けていくという方向で支援を始めることになりました。

B 課題の整理 援助者が想定する対応・方針

あなたは、この方に「どんな姿」や「状態」になって欲しいのですか。

- ・「今はまだ書き続けたい」という言葉どおりに、負担を少なく個人ノートへ書くことができる。
- ・「最後まで成し遂げたい」という言葉どおりに、物事を順序立てて行えたり、活動の動きについていける。

そのために、当面どんな取り組みをしたいと考えていますか(考えましたか)

- ・その場その場で本人に状況や起きていることなどを聞く。
- ・その状況のとき(書きづらいとき・動きづらいとき)にいろいろなことを試してみる。
- ・試してみた結果を、一度の話し合いや試みで終わらせず、日を変え場を変え、人(スタッフ)を代えて行い、必ずAさんにも確認する。

【質問】

Aさんの支援についてケアチームが目標（長期・短期）としていることは何ですか？目標設定の際にAさんの意向はどのように取り入れましたか？

【回答】

本人がどうありたいのか（支援目標）ということは、二重線をAさんの目標、波線をスタッフの目標として考えました。「今はまだ書き続けたい」という言葉どおりに、負担を少なくして個人ノートへ書くことができるサポートの工夫をする。「最後まで成し遂げたい」という言葉どおりに、物事を順序立てて行えたり、活動の動きについていけるようなサポートの工夫をする。

また、Aさんの意向は、直接お話をしてこれからどうしていききたいのか？どんなサポートが欲しいと思っているのか？など、そこで話したことを一つずつ確認しながら取り組みを進めました。

C 本人の状態や状況を事実に基づいて確認してみよう

困っている場面で、本人が口にする言葉、表情やしぐさ等を含めた行動や様子等を事実に基づいて書いてください。

- ・活動内容をノートへ書くときに、ホワイトボードの方へ視線は行くが、焦点が定まらない様子で何度も手元とボードを行き来していた。Aさんに尋ねると、「重なって見える。画数が多いと真っ黒に見える。」「視線を移すと今書いていたことが一瞬に消える。」「ひらがなは曲がっているところが多くて（曲線？）難しい。」という返答があった。書くことを中止するという選択肢もあると話し合うが、「書けないようになるのはわかっているが、でも今はもう少し書き続けたい。」と話した。
- ・活動中、次へ移る時に、立ちすくんでしまったり、他のメンバーから遅れ、固い表情になることがあった。Aさんにその時の様子を尋ねると、「切れてしまうんだ。」「さっきしていたことがなくなるんだ。」「つながらないんだ。待ってくれという感じだ。」と返答があったが、「でも今は最後まで活動についていきたい。」と話した。

【質問】

あなたが、Aさんと誠実に向き合う様子がこの記述から深く読み取れます。私たちにとって認知機能の障害は体験したことがないものだから、どんな言葉もある意味では他人のことになりがちです。そこで、進行していく気持ちをAさんが言葉にするとき、あなたはどんなメッセージを返していますか？

【回答】

正直、進行していく気持ちを言葉にする時、その言葉をどう受け止めて返すことができるのか、随分と悩みました。でも、Aさんは真正面から私たちにぶつかってきてくれているのだから、私たちも気持ちを隠さず、慰めでも励ましだけでもなく真正面から向き合って行こうと決めました。

ある時の会話ですが、Aさんから、「混乱することが増えた。」と言われたとき、私は、「悪くなっていると思う？」と聞き返しました。するとAさんは、「思う。あんたはどう思う？」と問い返し、私は、「私もそう思う。」と答えました。その返事にAさんは、「そうだな、自覚は正しいってことだな。」と言い、それじゃあこれからどうしていくのかという話し合いになったのです。こんな風にありのままを言葉にしながら、まだまだ完全ではありませんが、一緒に病気に立ち向かっていく努力をしています。

D 課題の背景や原因等の整理

本人にとっての行動や言葉の意味を理解するために、別紙の展開図に記入してから、課題の背景や原因として考えられることを書きだしてみましょう。

- ・記憶障害や空間認知障害などのために、視線を移す距離やボードと座席の距離などの配慮が必要ではないか。
 - ・文字の見え方についての訴えが多いため、書く文字(ひらがな、カタカナ、漢字など)の使い分けや書き方(大きさ、色使い、細い、太いなど)に関係があるのではないか。
 - ・次の動作ができないのは、次に何をすればいいのかがわからないことと合わせて、今(少し前)何をしていたのを忘れてしまっているため、つながりが持てないということだろう。さっきしていたことがなくなっているのであれば、そこを取り戻してもらうことからの関わりが必要ではないか。
- ただ、たくさんの説明はいらないとか、全部は言って欲しくないという言葉には、自分で何とかしたい、覚えていたいという気持ちが強くあるように感じるため、その気持ちへの配慮も必要ではないか。

【質問】

今、Aさんの気持ちにあることや思いを推察し、理解した上でどのような言葉をかけますか？

【回答】

できなくなったことを受け入れながらも、『それをできることへ変えていこう。』という、『病気にはそう簡単には負けない。』という強い思いがあるように思いました。ただ、そう思われる一方には、この病気は治らないということをしっかり自身で受け止めているとも思いました。告知を受けているからこそ、私たちからの曖昧な返答や支援は受け入れられるものでもなかったですし、だからこそ私たちも病気が悪くなることについてなど、正面から話すことができました。多くのことを話しますが、その話し合いの最後は、「悪くなくても生きていれば何とかなる。」ということと、「どこまでかはわからないけれど一緒にやっていこう。」という言葉をかけあって締めくくっています。

E 事例に書いた課題を本人の視点に置き換えて考えてみよう

ここで、この事例を本人の立場から、もう一度考えてみましょう。

本人の言葉や様子から、本人が困って(悩んで)いること、求めていることは、どんな事だと思いますか？

- ・字が書けないということや段取りが組めずに前へ進めないというような中核症状に対して、あきらめずに自分にできる対処方法を一緒に考えて欲しいと思っているのではないか。
- 具体的には、文字を書くことに対して、「今はまだ書き続けたい。」し、物事を順序立てて行うことに対して、「最後まで成し遂げたい。」と、できないことを中止するのではなく、今はまだ、様々な症状からの生きづらさと直面しながらも、前向きにできることを見据えて続けていきたいと思っているのではないか。

【質問】

一緒に考えたり、できることを見据え続けるというあなたの記述をもう一步すすめると、具体的にはどんな支援をするという意味でしょうか？

【回答】

この時のAさんとの取り組みは、字を書くことと、物事を順序立てて行うことの2点に絞って取り組んでいましたので、具体的にはどうすれば字が書きやすくなるか？どうすれば段取りが組みやすいか？あ

るいは段取りを忘れないでいられるのか？という事を考えました。具体的な取り組みについては、毎回Aさんを交えて話し合いをして、実践してみても話し合いをして、修正したり継続したりしました。具体的に何をどのようにしていったのかについては、Fに書いているようなことですが、いつも心においていたことは、取り組みを中止するという話し合いも必要とされるということと、いくら頑張っても病気の進行には勝てない現実があるのだということ、Aさんにしっかりと伝えながら見極めていくということでした。

F 課題解決に向けた 新たなアイデア

あなたが、このワークシートを通じて思いついたケアプランなど、新しいアイデアをいくつか書き出してみましょう。

- ・書く場面での場所や座席、書き写しの方法などの見直しや、その時の用具（ペンや紙）の選定、使う文字の大きさや文字の種類などをもう一度Aさんと一緒に確認しながら最適なものへと移行する。（視線を動かす距離を最短にするために、スタッフが書いたものをノートに写す。隣で読み上げた内容を書いてもらう。利用するマーカーは細字にして文字の大きさに注意し、時にはひらがな、カタカナを利用してみる。罫線のない用紙とある用紙で試してみる等）
- ・直前の動作と今からの動作をつなぐ言葉を簡潔に伝える。ポイントをヒントとして伝えてみる。話すペースや声の大きさ、テンションの高低に気をつける。適しているのかわからなければAさんに確認してみる。（わからないと言われたからすぐに伝えるのではなく、直前の活動内容をヒントとして伝えて考えてもらう時間を作る。多くの表現や言葉を使わず、ポイントを簡潔に静かに伝える。「わかった？」と聞いてみる等）
- ・書くこと等続けることに対して様々な工夫は行うが、工夫をしてがんばることさえもAさんの負担となってきたと私たちが感じた時には、できなくなったことを受け入れられるようにAさんともう一度話し合う。

【質問】

ここまで真摯な生き方を実践するAさんの姿を、家族はどこまで理解されているのでしょうか？今ある力を保持する事はどんなに困難な事かを、Aさんと家族にも伝えてみましょう。私たちの支援にも限界があるけれど、ともに生きる人間として一緒にいることはできると伝えたいかがでしょうか？

【回答】

家族はほとんどすべての出来事を知っています。ここでのこのような取り組みは、家族の意見もいただいているので、どのように変わってきているのかなど病状も含めて知っていますが、理解となるとすべてとは言えないのかも知れません。ただ、妻や子供はAさんのこのような生き方を病気の発症当初から支えています。その様な関係ですので、Aさんは妻や子供にも病気の進行具合などについて意見を求めたり、妻や子供からも病気や症状についての問いかけなどは日常的にしています。

また、現状保持の困難さについては、Aさん、家族ともに、十分に認識はしていると思います。それでも、「わかっても明日に期待をしてしまう。」「いつかは治るかも・・・と信じてしまう自分たちがいる。」と話したことがあり、あきらめきれない気持ちはいつもあるのだと思います。私たちの支援に限りがあることもAさんや家族、そして私たちが共通に理解し合った上で、人として一緒に歩いていくことを今後も続けていきたいと思っています。

【全般的な質問】

認知症の中核症状そのものを深くさぐるこの事例は、私たちにとって未知な部分が多く、それだけに興味深く、勉強になります。興味深いと書いてしまいましたが、Aさんの苦痛や不安を思うと大変失礼な表現で申し訳なく思います。それ程、あなたは貴重な学びの体験をされていて、しかも、大変誠実にAさんに向き合っているのが印象的です。家族みんな元気で幸せでいてくれることをAさんは願っていますが、家族は、特に妻はAさんの存在を負担と感じているのでしょうか？年齢的に若い場合は社会的にも経済的にもやり残したことが多いと思っていますと考えます。

【回答】

妻の負担は計り知れないものがあると思います。経済的な援助としては使える制度はすべて利用していますが、妻は家計を支えるためフルタイムで仕事を続けています。子供達も仕事をしながらそんな両親を支えています。病気になったことを一切隠さず、親戚や近所の方へも早くからオープンにしていたので、周囲からのサポートもひとつの大きな力となってこの家族を支えているのだらうと思います。それともうひとつは、Aさんには、同じ病気と闘う仲間がいて、家族にも同様の仲間がいるということです。

この方達の合い言葉は、「病気になったことはあきらめるが、これからの人生はあきらめない。」という言葉です。この言葉の通り、仲間同士で支え合い、生きていることは本当に大きな力になっていると思います。

Aさんと出会い、できないことを突き詰めるのではなく、真摯な態度で真正面からその中核症状について話し合ってみることができました。結果としては、Aさんから発信されるすべてのことにヒントがあり、私たちが考えなくてはいけない事柄が多く潜んでいることに気がつきました。私たちは日々、Aさんに聴くということ意識して、その機会を多く持っていたのだらうか？その機会を生かしてAさんの生きづらさに対して正面から向き合うことができていたのだらうか？中核症状だからとあきらめてはいなかったらうか？など多くのことを更に深く考える機会になりました。

（助言者の考察）

認知症の人の支援を行うにあたり、多くの場合は可能な限り周辺症状を抑えることが最大の課題になります。中核症状（失認、失行、記憶・見当識の障害など）については、いつ症状が発現しているのかさえも介護者につかめず、ご本人のなかでどんなふうに苦しいのか私たちにはわからないものです。それをこの事例提供者は、本人の身近にいて、身近にいることを本人と同じレベルで空気のように違和感なく、その苦痛を共有できる立場の介護を実践されています。進行性の認知症という病気がもたらすやりきれなさを、家族も含めてみんなで正面から向き合っている介護こそが貴重なことと学ぶことができました。

本人の言葉として表現できることは、やがては減少していくことでしょう。本人が発信される情報を広く読み取って、やがて訪れる最期まで、ケアチームが力になれるように願っています。認知症については未知の部分があり、どんな支援が適切なのか迷うこともあります。それでもケアチームが本人と一緒に病気に立ち向う努力から、学ばせていただきました。